

# キリストの愛に包まれて

—音楽による看取りへのケア—

キャロル・サック

## はじめに

今日私が美しいと信じる自分の仕事についてご紹介できる機会が与えられた事を心から感謝いたします。今日は正式に音楽による死生学を日本・アジアで初めてお話しますので私にとって記念すべき日になります。死生学を意味する英語の *thanatology* は、ギリシア語の「死」を意味する *thanatos* からきている言葉です。この仕事を PGC を通してご紹介できることを感謝いたします。なぜなら私がトレーニングを受けることが出来たのは PGC のご協力とご支援により可能だったからです。所長である主人が留守の間、皆様が PGC の働きを助けて下さったことを感謝申し上げます。旧約聖書のアブラハムの様に、祝福を受ける恵みを感じ、結果として神の愛を他の人達に与える器となれる様に祈ります。

## 臨終のいやし

まずお話の始めに、皆様を千年前の中世ヨーロッパのある場所にお連れしたいと思います。そこはフランスのクーニー地方の、ベネディクト会修道院です。この大きな影響を与えた修道院の活動の中で、修道士達は美しい物の理想に強い精神性を考えておりました。彼らは美は私達が神的なものを経験する1つの方法と信じていました。中でも特に音楽に最も細心の注意を払いました。修道士達は聖なる意図をもって歌われた音楽は永遠の世とこの世が交差する1つの場所になると信じていました。美に注目するのに加えて、修道院は懸命な作業により究極的に、現在私達が知る病院システムへと発展しました。それが修道院の養護室でした。この養護室で身体の弱い人、病人そして死にゆく人の世話や介護が行われました。修道士達はそうした人びとを介護し面倒をみました。人びとをキリストご自身とみなしたわけです。こうした人たちの面倒をみながら、次の2つの意味をもつ格言を指針としました。〈身体の為の介護 (care) と魂の為の癒し (cure)〉彼らは尊敬の念をもって格別のケアを、死にゆく修道士たちにいたしました。その儀式は、愛と尊敬の念と支え、交わり、そして音楽を通しての美によって温かく包みこんでいきました。その修道士の死が近いことが告げられると、その死にゆく修道士の傍らで、聖書の言葉を唱え聖歌を歌いながら彼が無事に天国に導き入れられる迄温かく包み込んで歌い続けるのです。

現代社会は地上の最後の息を引き取る時を〈死〉と呼びます。私達人間の存在は、あたかも2つの本立てが本を挟んでいる様に私たちの存在も、最初の息と最後の息との間に在ると示されるのです。この最後の息を修道士

達は「死」と呼びませんでした。死という言葉は英語で永遠の終わりを意味するからです。そのかわり、トランジトウス〈*Transitus* (移行)〉と呼び、それは転換・変化・移動の意味があります。丁度誕生の産声、呼吸は新しい世界へ向かったように、キリスト教の伝統のなかでは、修道士達は最後に引き取る息は、私達の想像を遙かに超えた何か美しい素晴らしい広い世界へ向かうものと信じていました。それ故に、修道士達は死にゆく人に対して、最高のケアと敬意をもって接しました。私の働きのある部分は、そのような人に荣誉と尊厳を示すことなのです。

## 神聖なるもの

30年前、ある若い女性は、大学の学資を稼ぐために老人施設で働いていました。彼女はその施設の患者の介護や、死にゆく人の処置も含めて訓練を受けました。その訓練は衛生学、効率的なケアの方法、清潔清浄作業と、また死体をいかに処理して菌の伝染をいかに防ぐか、などに集中した仕事で、部屋をすばやく消毒して、次の患者を出来るだけ早く入室させる仕事をしました。

ある時、特に扱いの難しい患者がいました。その人は肺気腫の患者でした。患者はワーカーに怒鳴ったり唾をはいたり、食べ物を投げたり、暴言をはいたりするので、誰も訪ねる人はいませんでした。しばしばワーカーたちの嘲笑の種で、ワーカーたちは休憩時間にその患者のうわさをしました。ある晩、この女性が勤務当番のとき、この患者は死が近い、今夜死ぬかもしれないと告げられました。彼女がその部屋に入ってみると、この患者はまさに死に直面していました。彼女はこれが死にゆくことなのだと思いました。彼女は怖いと感じながら患者に近づきました。この人はいつも人を追い払い、排除していましたが、この時はいつもと違い、パニック状態でした。彼女が手をおくと、その手をいきなり掴み、おびえた目で彼女を見つめたのです。彼女は患者が誰かに死のときを看取ってもらいたいと願っていることに気づきました。彼女はそこでドアを閉めてその人のそばに留まり、極めて近くに寄り添い、手で抱えてあげました。そして思わず歌い始めました。延々と、歌い続けました。患者はおだやかに目から恐れは消え、歌をききながら死んでいったのです。安らかに亡くなっていきました。この患者の旅立ちを目の当たりにした時、彼女は何かとても神聖なるものを目撃したということがわかりました。彼女が目撃したのは修道士達が「臨終のいやし」について語っているのと同じものでした。これがきっかけとなっ

て私が訓練を受けた音楽療法の仕事が出来たのです。

若い女性の名は、テレース・シュローダー・シーカーで、現在は50代になりました。彼女はその時からこの仕事を1人ではじめ、コロラド州のDenver地区で他の人に教え、主に大学と神学校で20年間働きました。

10年前にテレースは、モンタナ州のミゾーラの聖パトリック病院に招かれ、そこに、ハーブと歌声により、温かく包んであげるミュージック・サナトロジストを養成する為の学校を設立しました。聖パトリック病院はモンタナ西部では一流の病院で、ヘリポートが屋上にあり、遠方の重病人はヘリコプターで輸送され、最良なケアを受けられます。10年間でミゾーラ地方だけでも介護施設、ホスピスや在宅で5,000人以上の患者が同じケアを受けました。

丁度助産婦が産みの苦しみの母と子を手を助けるのと同じ様に、ミュージック・サナトロジストは死にゆく人の困難なこの世からあの世へ[移行]するトランジトウズを助けるのです。10年たった今、私を含めて50人が資格を得た卒業生です。私達は主に病院で働き、米国の太平洋岸北西部、カナダ、英国、スコットランド、スペイン、オランダ、イスラエル、オーストラリア、そして今、ここ日本で働いています。アジアのこの地方で私が働けることを謙虚に感謝していることをご理解いただきたいのです。

### ミュージック・サナトロジストの働き

具体的にどの様にこの仕事が出来ているかを説明したいと思います。アメリカでは、私たちは、1年365日、毎日12時間勤務で呼び出しベルを持ち歩いて、いつでも呼び出されることになっています。呼び出しは、医者、看護師、チャップレン、ソーシャルワーカー、患者の家族や、時には数少ないですが患者本人からくるのです。

呼ばれたとき、直接呼び出された場所にいきます。私達はハーブの音の調律をし、看護師と相談します。看護師以外の介護者が患者の面倒をみていればその人と話し、ハーブをもって部屋に入り、まず患者が意識があっても無くても、まずその患者に自己紹介します。次に家族に自己紹介し、他に同室の人がいれば、その人にも自己紹介します。もし初めての経験なら、短く説明して、そこにいる全ての人が快適に過ごせるように、どうぞ自由にリラックスして眠っても結構ですと伝えます。

それから患者の脈や体温を計ったり、呼吸を数えたりしました。それからハーブのところに座って静寂の中で始めます。静けさの中で患者に関して気がつくことをしっかり観察します。患者が目覚めているか眠っているか、意識があるか無いか等をみます。何か不安そうか安らかか、痛みが無いのか、脈が速いか遅いか、といったこともみます。

そして今患者さんを観察して、どんな音楽がこの患者にとって最も有益かを感じられるようになるまで待つのです。おそらく見守りの中で一番大切なことは、患者の呼吸のペース/パターンを知ることです。なぜなら音楽をその患者さんのペースにあわせるからです。こうして

患者本人が音楽の道案内となるのです。患者が注目される中心人物であり、患者がリーダーとなる



のです。わたしは、たとえ意識が無くなった状態であっても、このことで患者が深く尊敬を感じると、感じています。おわかりのように誰でも最期の瞬間まで脈拍と息を保っています。それから、45分から1時間ほど、ハーブと歌声、ハーブのみ弾いたり、歌声だけ、ある時はハーブと歌両方という、音楽の時間のところどころで、静かな沈黙をおいていくのですが、どんなときでも、瞬間、瞬間の患者の生理的変化に対応していくのです。

私達は患者とともに居るこの時を、Vigilと呼びます。これはラテン語ですが英語の「be alert (よく見極める)」という意味のラテン語から来ています。

私達は、音楽をあくまでも薬として演奏します。おわかりと思いますが音楽は患者によって異なり、決して同じものではありません。1人ひとりの患者により、その日によって、音楽は変えていきます。なぜなら、音楽は患者の特徴にあわせて瞬間瞬間にあわせていくものだからです。約20曲を基本の音楽としてもっています。しかしハーモニーやテンポ、構成、伴奏曲、歌声など、様々な患者に誘われるようにして組み合わせ、無限に変化を加えていくのです。これを「薬となる音楽」とよんでいます。そういうわけで私達はレコードとか録音された音楽は使いません。人の声は人間の交わりと関係の温かみをつたえたと感じます。ハーブは、楽器の中で最も古い起源をもつものです。単音で奏でる弦のみならず、和音表現を持っていて、有益なことに利用できるものの1つです。これはまわりを静める音色と響きの性質があいまって、ハーブはベットわきに最適な楽器となります。旧約聖書の中でダビデが堅琴と歌によってサウル王の心の苦悩を静めたことを思いだされるかもしれません。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪  
このあとハーブによる実演がありました。  
♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

(2003. 2. 18 カウンセリング公開講座より)

### 講師紹介

ミュージック・サナトロジスト

ガステーバス・アドルフス大学卒業。

1982年からアメリカ福音ルーテル教会宣教師として日本で働く。

Chalice of Repose Project School of Music Thanatology (モンタナ州)で2年間のトレーニング修了、2002年認定資格を授与された。